

解 答



問一 ウ 問二 エ

問三 メアリは召使いであり、メアリがおしゃべりなのはメドロックさんの教育がなっていないせいだと思ったから。

問四 ア 問五 頭

問六 メア리를コリンに近づけたくはないけれど、二人ともコリンのことばにはさからえないから。

問七 あまり話し～などでした

問八 かたくなで心の狭い、愛することを知らない少女

問九 エ 問十 C

問十一 a 照〔る〕 b 新芽 c 単純 d 連中



問一 エ 問二 夜の冷たさと闇の深さ

問三 冗談など考えつくこともできないと思われる悲惨な恐怖の中で、魂をしぼり出すようにして生みだされる滑稽な話やジョーク。

問四 ウ 問五 エ 問六 イ 問七 エ

問八 悲しいときに悲しいと率直に言えるような感性を持つものだけが、本当のよろこびに出あうことができる。

問九 ア ○ イ × ウ × エ ×

問十 1 イ 2 ウ 3 ア

問十一 a 生態 b 懐〔かしい〕 c 交〔わし〕 d 率直

解 説



問一 「だれが生きる気にさせてくれそうか……」とメアリが言っていることから答えがわかります。

問二 いま問題なのは、コリンをだれが生きる気にさせられるかということです。その観点から、メアリの提案がこれ以上のものはないくらい有意義だったということです。その証拠に、コリンはいつの間にか「病弱で自分はまもなく死ぬと信じている少年」であることをわすれていましたし、「にぎやかに騒いでいました」。

問三 メドロックさんが「この召使いはだれひとりとしておしゃべりするものはおりません」と言いわけしていることから、クレイヴン先生がメア리를召使いだと思いこんで、メドロックさんを責めていたことがわかります。

問四 メドロックさんはメアリは召使いではないということ、したがって、自分の責任ではないということを言っています。

問五 コリンのことばを聞いたクレイヴン先生は、それ以上きびしいことを言えなくなります。それは、クレイヴン先生がコリンにはさからえないからでしょう。

問六 クレイヴン先生は「興奮は……よくない」と、メア리를遠ざけたがっていますが、「どうすることもできない」のは、コリンのことばにはさからえないからのようです。

問七 「忘れてはいけないことが……」という一文に着目しましょう。「忘れてはいけないこと」の内容は、この前の一文に書かれています。

問八 前書きには「誰からも愛されず感情の乏しかったメアリ」と書かれています。これと同じ内容のことばをさがしましょう。

問九 「(まるで) サクランボのように真っ赤」と考えるといいでしょう。「まるで……ように」と、比喻であることをはっきりと示しているものを「直喩」といいます。



問一 本筋ではないことを挿(はさ)挿みこんだ文章を挿話といえます。

問二 「……のだそうです」と、「夜の時間の冷たさ……不可欠である、という報告でした」という部分とが表記の上からも対応していることに着目しましょう。

問三 「フランクルたちは仲間と……」以後に、『夜と霧』の中にえがかれているユーモアが説明されています。そして、「このようなユーモアが、たぶん〈ガ尔蒙フル〉というのではないかと思います」と書かれていることから、「このようなユーモア」を説明すればいいのだろうと見当がつかます。

問四 「大量生産大量消費の……奇蹟のような感じさえ」ということから、大量生産大量消費の時代には、このような本はあわないはずだというニュアンスが感じられます。その観点から書かれているのはウだけです。

問五 「どんなに苦しくても、どんなにつらくても、人間には笑いが必要だ。だから……」の部分に着目しましょう。

ここに、彼らは生きるために笑いを求めたのだということが書かれています。「笑いを求めたから」ということばが決め手となります。ほかの選択肢では、「魂をしぼり出すようにして滑稽な話を考え」なければならない理由にはなりません。

問七 いずれのことばも「切ない」「悲しい」「苦しい」という形容詞から派生したことと、「切なさがこみあげる」というように、名詞に変わっているという点に共通点があります。

問八 「ぼくは、深く悲しむもの……と思います」という一文に、筆者が「悲しむこと」が「よろこび」を生み出すと考えていることが書かれています。この一文を中心としてまとめるといいでしょう。

問九 本文全体を通しての筆者の主張を選ぶことに注意しましょう。本文にはアサガオ研究家の話や、ガルゲンフモールということば、『夜と霧』という本などがとりあげられていますが、それらの共通点とから筆者は「深く悲しむものこそ本当のよろこびに出あう」と主張しています。ほかの選択肢は、本文にあってはるか否かは別としても、筆者が主張したいことではありません。